

結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理
質問紙結果から

研究協力者 佐渡 忠洋（常葉大学健康プロデュース学部）
研究協力者 堀田 亮（岐阜大学保健管理センター）
研究分担者 西尾 彰泰（岐阜大学保健管理センター）

結婚と子ども持つことを望む高校生および大学生の心理を探索的に検討するために、本研究では、平成 25 年度に本研究班が実施した大規模質問紙調査の結果を再度分析した。最初に、心理学的検討に値する項目に着目し、調査で得られた結果を 4 カテゴリー・26 項目に整理して、高校生 1,673 名（平均年齢 16.5 ± 0.74 歳）、大学生 1,118 名（平均年齢 19.75 ± 1.09 歳）を分析の対象とした。まず、26 項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、21 項目に差が認められ、結婚と子どもを持つことを望む者は大学生に多かった。さらに、高校生と大学生のデータを、それぞれクラスター分析で検討した結果、高校生と大学生とでは質を異にするクラスターが導き出され、社会観や家族観は男女で異なることが示唆された。特に大学生では、男性は社会的な活動に意識が向き、女性は結婚と子どもを持つことに加え、家族や家庭に意識が向いていることが示された。したがって、今後は年齢と性差を考慮して、本研究班が集積してきたデータを分析していく必要性が明らかになった。

A. 研究目的

日本が抱える少子化と晩婚化などの問題は、解決困難なものである。容易に解決できるものであれば、これほどまでに問題視されることはなかっただろう。しかし、個人の幸福のみならず、社会の発展を重んじるならば、本問題の探求は続けるべきである。本研究グループは、そうした社会的要請に何らかの形で応えるために組織されたと言っても過言ではない。

厚生労働省科学研究費補助金を受けたわれわれは、本事業の中核に、高校生と大学生に対してライフプランを考える機会を提供することを据えてきた。すなわち、結婚したいと考え、子どもをもちたいと考えている若者に、教育的介入を行うことで、当の若者たちが自らのライフプランが実現できるように支援することが、先述した問題に対して現実的に応える一つの方略であると考えてきた。そのために、平成 25 年度は全国的

なアンケート調査を行うことで仮説の生成に務め、平成 26 年度は DVD 教材を独自に作成し、教育的介入の効果を実証的に検討した。

本事業に対して心理学が貢献できる領域は甚だ限られている。というのも、心理学は主として個を扱う学問であるから、政策や社会へ如何にして介入していくかという直接的な理論を十分有していないためである。しかし、結婚を望むことや子どもを望むことに関連した心理学的な事柄を探求することに関しては、十分貢献できると考えられる。

そこで本研究は、平成 25 年度に実施した大規模質問紙調査の結果を、これまでとは異なる観点から検討することで、結婚を望む若者、子どもを持つことを望む若者の心理に接近しようと考えた。なお、この質問紙の結果は、すでに昨年度の報告書において基礎的な分析を行い、まとめて報告しているものである（山本ら, 2014）。

B. 研究方法

1. 対象と手続き

対象は、全国の高校生 1,866 名(6 校)、および大学生 1,189 名(11 大学)の、計 3,055 名である。

調査は 2013 年 9 月～2014 年 2 月に行った。対象者に本研究班が作成した質問紙(資料 1)を配布し、自己記入式での回答を求め、回答終了後に回収した。

(倫理面への配慮)

本研究の実施にあたっては、岐阜大学医学部の医学研究倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 25-268)。

2. 結果の整理

得られた質問紙法の結果の中で、心理学的検討に値する質問項目を抽出して、再度結果を整理した。整理した手段は、表 1 に記した。その結果、4 カテゴリー計 26 項目の項目で以後の検討を進めることになった。対象者の各項目の回答は、必ず「該当する」か「該当しない」のいずれかに分類できる形になっている。

検討は高校生と大学生とを分けて行っていく。質問紙の結果を整理する上で、回答に不備があったデータと、年齢幅を統制するために大学生の場合は 25 歳以上のデータは除外した。その結果、高校生は男性が 1,011 名、女性が 662 名、計 1,673 名(平均年齢 16.5 ± 0.74 歳)が、大学生は男性が 247 名、女性が 856 名、計 1,118 名(平均年齢 19.75 ± 1.09 歳)が検討の対象となった。以下、これを整理データと呼ぶ。

3. 分析

データは、「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」に特に注目しつつ、まずは高校生と大学生とで整理データの出現度数に差があるかを検討する。そのために、高校生と大学生の出現度数を、カイ二乗検定を用

いて比較した。

次に、高校生と大学生とそれぞれで、整理データの項目間の類似・近似関係を検討する。そのために、整理データの各項目に「該当する」場合には 1 を、「該当しない」場合には 2 を与え、階層クラスター分析(word 法)を用いて分析した。

なお、統計分析には PASW(SPSS)ver.18 を用い、カイ二乗検定では p 値が 0.05 以下を有意差ありと判断した。

C. 研究結果

1. 高校生と大学生との比較

整理データの出現度数を、高校生と大学生とで比較した結果、26 項目中 21 項目に有意差認められた(表 2)。

2. 高校生の整理データにおける項目間関係

高校生のクラスター分析で導き出されたテンドログラムを図 1 に示した。本図を読み込んで、3 つのクラスターを抽出し、順に 高クラスター、高クラスター、高クラスターと名付けた。

3. 大学生の整理データにおける項目間関係

学生のクラスター分析で導き出されたテンドログラムを図 2 に示した。本図を読み込んで、3 つのクラスターを抽出し、順に 大クラスター、大クラスター、大クラスターと名付けた。

表1 平成25年度質問紙調査結果の整理項目（整理する方法と基準）

A. 基本情報

- A1：男性（Q1-2で「男性」と回答）
- A2：女性（Q1-2で「女性」と回答）
- A3：実家に父親がいる（Q1-7で「父」を選択）
- A4：実家に母親がいる（Q1-7で「母」を選択）
- A5：実家にきょうだいがいる（Q1-7で「兄」「姉」「弟」「妹」のいずれかを選択）
- A6：家の経済状態はよい（Q2-11で「上」か「中の上」を選択）
- A7：自分の健康に関心がある（Q2-14で「非常に関心がある」か「まあ関心がある」を選択）

B. 食事・生活

- B1：1年以内に部活をしていた（Q2-3より）
- B2：食事時間が楽しい（Q3-1-aで「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選択）
- B3：食卓の雰囲気は明るい（Q3-1-cで「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」を選択）
- B4：体型が気になる（Q2-7で「非常に気になる」か「やや気になる」を選択）

C. 人生の中で重視すること（Q2-10-a～kで無回答は該当しないと考えた）

- C1：人生で勉強が重要（Q2-10-aで3位以上と位置付けた）
- C2：人生で仕事・アルバイトが重要（Q2-10-bで3位以上と位置付けた）
- C3：人生で円満な家庭が重要（Q2-10-cで3位以上と位置付けた）
- C4：人生で趣味やスポーツが重要（Q2-10-dで3位以上と位置付けた）
- C5：人生で健康な体が重要（Q2-10-eで3位以上と位置付けた）
- C6：人生で友人付き合いが重要（Q2-10-fで3位以上と位置付けた）
- C7：人生で異性との付き合いが重要（Q2-10-gで3位以上と位置付けた）
- C8：人生で収入や財産が重要（Q2-10-hで3位以上と位置付けた）
- C9：人生で地位や名声が重要（Q2-10-iで3位以上と位置付けた）
- C10：人生で社会への貢献が重要（Q2-10-jで3位以上と位置付けた）
- C11：人生で子育てが重要（Q2-10-kで3位以上と位置付けた）

D. 将来構想

- D1：将来は経済的に不安（Q2-12で「強く感じている」か「やや感じている」を選択）
 - D2：将来は結婚したい（Q4-1で「いずれ結婚するつもり」を選択）
 - D3：将来は子どもが欲しい（A4-4で「子供は欲しい」を選択）
 - D4：今の家庭が理想的（Q4-12で「思う」を選択）
-

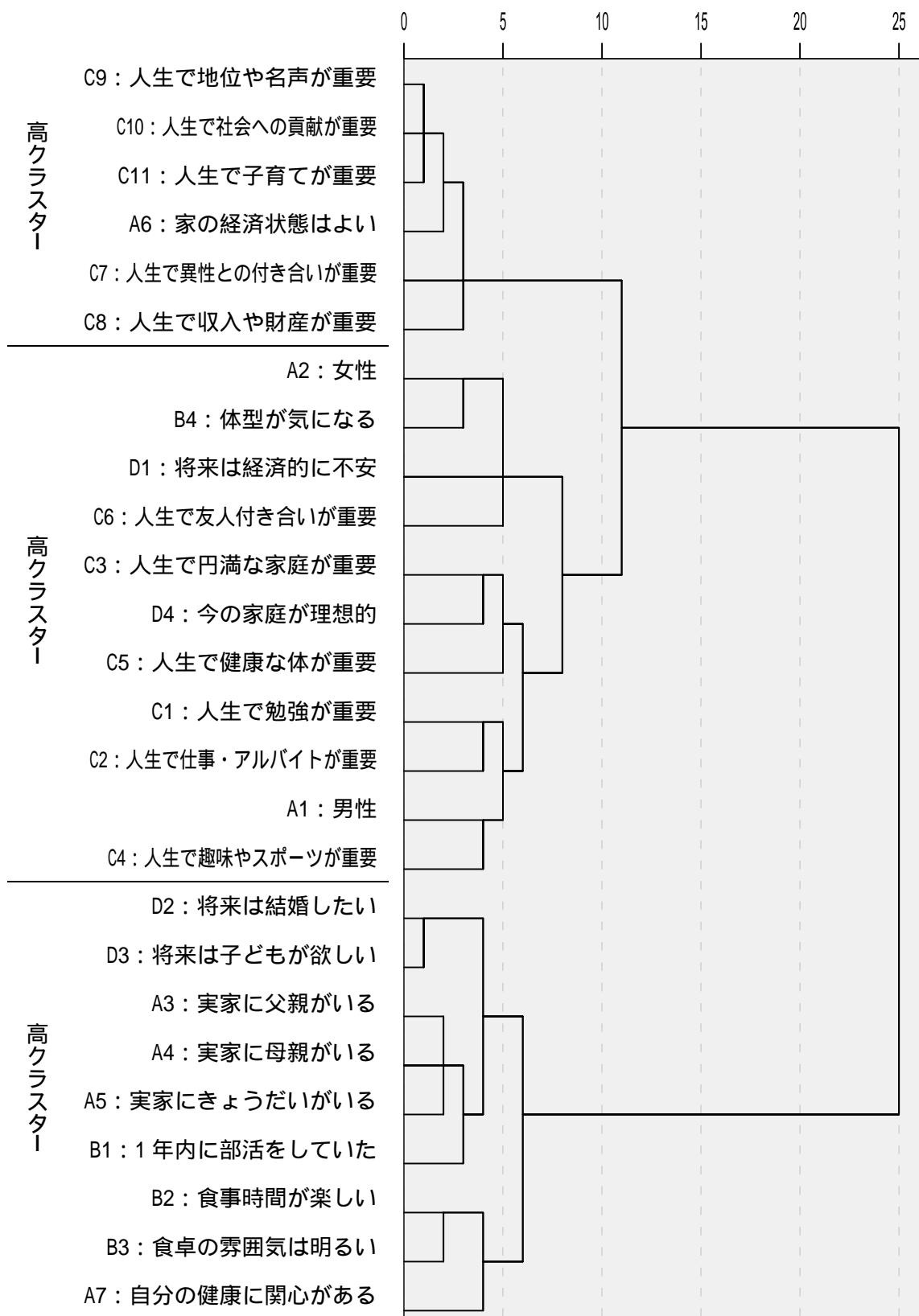


図1 高校生のクラスター分析のデンドログラフ

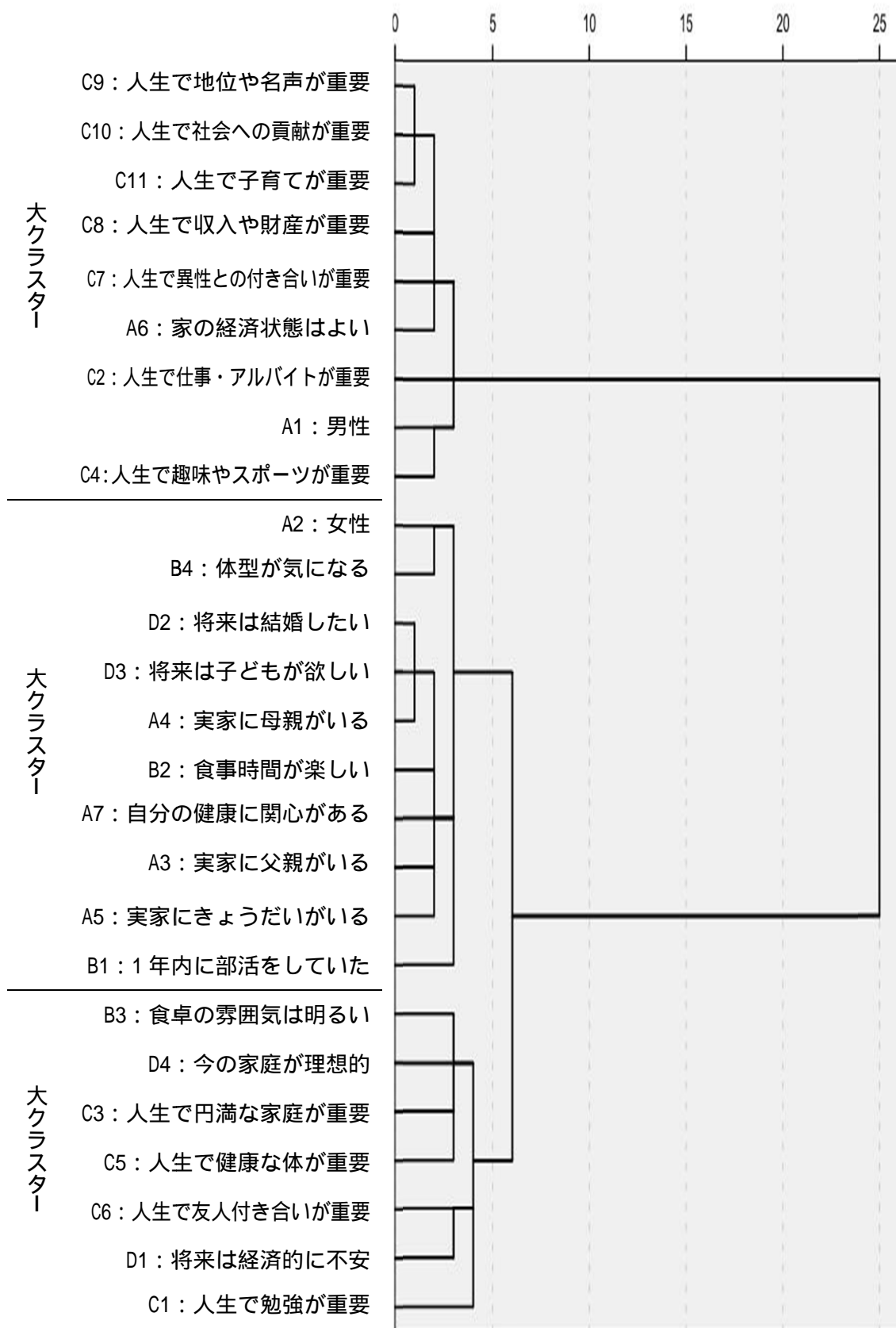


図2 大学生のクラスター分析のデンドログラフ

D. 考察

1. 高校生と大学生との比較結果について

各項目の出現度数を高校生と大学生とで比較した結果、26項目中21項目で差があった。データが千人以上と多いために、微細な差を抽出した可能性はある。しかし、これほど多くの項目で差が認められたということは、高校生と大学生とでは整理データで異なる傾向を有していると考えられるべきであろう。そのため、高校生と大学生を分けてクラスター分析を行う意義は、十分あると考えられる。

本研究が着目する「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」でも、高校生と大学生とで差が認められ、高校生よりも大学生で有意に多かった。この結果は、人生経験を積み、特に心理的な成長をするにつれ（高校生から大学生の間で肉体的な成長は、心理的なそれほどには顕著ではないだろう）、結婚と子どもをもつことに積極的になる可能性を示唆しているのかもしれない。

2. 高校生のクラスター分析結果について

高校生の整理データをクラスター分析によって検討した結果、3つのクラスターが得られた。

まず、高クラスター内の項目を見ると、地位や社会や経済や収入に関するものが多かったため、社会観に関するクラスターと理解できる。また、高クラスターには両性別が含まれるとともに、健康や自らの家族への態度と関連する項目が多かったため、健康観・家族観に関するクラスターと考えられる。さらに高クラスターには本研究で着目する「D2: 将来は結婚したい」と「D3: 将来は子どもが欲しい」、および家族・家庭の状況に関する項目が多かったため、最も注目されるべきクラスターであった。この高クラスターで「D2: 将来は結婚したい」および

「D3: 将来は子どもが欲しい」と、家族・家庭の状況に関する項目がまとまりとして見出されたということは、これらに強い関連があることを示唆している。したがって、もし高校生に「結婚したい」や「子どもが欲しい」との動機付けを行う介入をするのであれば、あるいは「結婚したい」や「子どもが欲しい」の想いを実現できるように教育的介入を実施するのであれば、個人の家族・家庭状況を踏まえる必要がある。

ただし、本結果の読み取りには注意を要する。「父母がいる」、「きょうだいがいる」、「食事が楽しく食卓が明るい」ということと、「結婚したい」および「子どもが欲しい」との関連は認められたが、そこに如何なる因果関係があることを先の結果は示してはいないからである。この点にわざわざ言及しなければならないのは、統計結果の読み込みに慣れていない者は誤った認識を抱いてしまうため、そして本テーマに敏感な者は的外れな点に批判することが懸念されるためである。つまり例えば、父母がいない者は「結婚したい」や「子どもが欲しい」とは思いにくい、ということの本結果は何ら示唆していない。

本結果が示しているものは、心理学的には、高校生が抱く「結婚したい」や「子どもが欲しい」という思いは、その者の家族・家庭という内的な対象関係と強く関連しているということであって、それは必ずしも現実の人間関係とは一致しない。配偶者と子どもという存在は、自らの家族のことであるので、それらを望む者が現在の家族に関心を強く持ち、家族にポジティブな思いを抱いていることは自然なことであろう。

なお、本結果で興味深い点は、高クラスターと高クラスターが大きく離れていることである。すなわち、「結婚したい」や

「子どもが欲しい」という思いと社会観とは、統計的に遠い関係にある。この解釈には際してはさまざまなことが考えられるが、まず、自らが家庭を持つということと、社会に出るということが、多くの高校生にとっては相反する関係にあるのかもしれない。社会が自らにとって外部、家庭が自らにとっての内部という関係にあるとすれば、高校生はこの両者を自身の内に抱えるまでに成熟していない可能性がある。これはある意味当然のことである。なぜならば、高校生で一人暮らしをし、自ら生計を立てている者が少ないことから、たいていの高校生は家族と現実的に強く結びついており、社会を直接経験するまでには至っておらず、社会へ進出するのはこれからの心理学的課題になっていると考えられるからである。したがって、先程の内と外という関係で見れば、高校生が社会への関心を持つということは、ともすれば、結婚や子どもをもつこととは別方向に進むことなのかもしれない。これは、結婚と子どもを持つことに関するプロモーションプログラムを高校生に対して実施する際の、留意点となるだろう。結婚と妊娠と就職は、どれも等しく人生の重要エピソードになるからである。

3. 大学生のクラスター分析結果について

大学生の整理データをクラスター分析によって検討した結果、3つのクラスターが得られた。

最初の 大クラスター は、高校生の高クラスター と類似するが、さらに男性が加わり、趣味や仕事に関する項目もまとまっている。一般的な意味での「男性らしさ」に関わる項目が集まったクラスターであると考えられる。大クラスター には女性や「D2: 将来は結婚したい」や「D3: 将来は子どもが欲しい」が含まれ、そして家族の状況に関する項

目がまとまった。大クラスター と対比するならば、これは「女性らしさ」と関連があるクラスターかもしれない。大クラスター は 大クラスター と統計学的に近似関係にあるものの、現実的な環境の項目が多く位置づけられた。

大学生のクラスター分析結果の特徴は、大クラスター と 大クラスター が峻別された点である。大クラスター が示唆するように、男性は社会と自分自身に多く目を向けている。「C11: 人生で子育てが重要」が含まれたのは、以前よりも男性が育児に参加するようになり、「イクメン(育児を積極的に率先して行う男性)」という言葉がメディアで度々取り上げられている現状を想起させる。一方、大クラスター からは、女性が家族・家庭へと目が向け、自らの結婚・妊娠を意識していることがうかがわれる。高校生と対比して考えると、大学生になると男性は自らの外部や社会への意識が向上し、かたや女性は自らの内部や家族への意識が向いていると読むことができる。以前よりも女性参画や女性の活躍が強く謳われるようになり、実際に企業等で実力を発揮している女性が増えてはいるものの、大学生によっては未だに、男性は家の外へ、女性は家の内へ、という志向性が根強く残っているのかもしれない。

E. 結論

現代の若者が抱く「結婚したい」「子どもが欲しい」という思いが、彼/彼女たちの如何なる現状や未来観、家族観と結びついているかを検討し、いくつかの仮説を導き出した。本稿は、明確な実証を目的とはしていないが、今後、若者たちが「結婚したい」「子どもが欲しい」という思いを実現していくことを、教育的介入によって支援することを目指すならば、年齢と性差は

重要な要因になることが示された。したがって、平成 26 年度に実施した DVD 教材と教育パンフレットによる効果を検証する際には、年齢と性差を分けて検討していくべきであろう。

【引用文献】

- 1) 山本眞由美研究代表. 若い男女の結婚・妊娠時期計画支援に関するプロモーションプログラムの開発に関する研究. 厚生労働省科学研究費補助金政策科学総合研究事業, 平成 25 年度総括・分担研究報告書. 2014.

F. 研究発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし